

視点

地場産業と大学の役割



駿河台大学経済経営学部 学長

おおもり かずひろ
大森 一宏氏

プロフィール

早稲田大学政治経済学部卒業、同大学院にて博士(経済学)取得。主な専門分野は日本経済史、日本経営史。

2006年4月駿河台大学経済学部(現経済経営学部)教授に就任。2012年4月より経済学部長、2015年4月より副学長、2016年4月よりグローバル教育センター長を歴任。2019年4月より学長に就任し、現在に至る。

2014年11月～2017年3月
飯能市行政改革審議会委員・会長。
2018年8月～
飯能市指定管理者選定委員会委員長等を歴任。

主要著書

『愛知県史 通史編8 近代3』(共著 愛知県 2019)、『近現代日本の地場産業と組織化—輸出陶磁器業の事例を中心として—』(日本経済評論社 2015)、『総合商社の歴史』(共著 関西学院大学出版会 2011)、『瀬戸市史 通史編 下』(共著 瀬戸市 2010)、『千葉県の歴史 通史編 近現代3』(共著 千葉県 2009)、『森村市左英門 通商立国日本の担い手』(日本経済評論社 2008)他

2015年5月から10月に開催されたミラノ万博は、「食」をテーマにした史上初めての万博でした。万博の日本館では、日本の食や食文化が紹介され、大きな反響を呼び、連日多くの来場者が日本館のレストランやフードコートで提供される食を求めて、長い行列をつくりました。ミラノ万博には佐賀県有田焼創業400年事業実行委員会や日本陶磁器産業振興協会も参加して、日本の焼物の魅力の紹介にあたりました。和食が世界に広がれば、その器である和食器の需要は世界中に拡大するはずで、陶磁器業者の団体が、「食」をテーマとしたミラノ万博に注目し、そこでの日本館の盛況に一役買ったのは当然のことかもしれません。

もっとも、日本の食材の輸出が注目されるのは、今回が初めてのことでありません。実は、幕末開港から明治前期まで、日本の茶は生糸に次ぐ重要な輸出品でした。茶を飲むためには、当然湯呑や急須が必要です。もし、茶の輸出が成功し、西欧に日本の茶が普及していたならば、和食器の輸出も活発に行われていたと考えられます。しかし、残念ながら西欧世界に向けた日本茶の輸出は失敗に終わりました。例えば埼玉県

では、入間郡扇町屋村（入間市）の副区長で、自ら茶の製造販売を行っていた繁田武平等によって狭山茶の輸出を目的とした狭山会社が 1875 年に創設されますが、同社の製品の販売を担当する日本アメリカ両国組合会社という貿易会社の経営がうまくいかないこともあって、結局茶の輸出を伸ばすことはできませんでした。

なお開港以後、茶の最大の輸出先はアメリカ合衆国でしたが、同国市場ではイギリスやインドから輸入された紅茶が競争相手として立ちふさがっていました。そうした状況の中で、日本では、茶の市場を拡大するために 1893 年のシカゴ万博や 1900 年のパリ万博において喫茶店を開店し、日本茶の宣伝に努めたことが知られています。しかし、当時の報告書は、日本茶に砂糖とミルクをたっぷり入れて飲むアメリカ人に日本茶の魅力は伝わらないと嘆いています。

結局、歴史的に見ると和食文化に支えられた日本茶やそれを入れる容器である和食器を海外に広めることは困難でした。他方で、コーヒーカップ、スープ皿などに代表される洋食器は、合衆国市場に販路を拡大し、日本の代表的輸出品にまで成長しました。1980 年代半ばまで、合衆国の多くの家庭は、日本製の食器を使って、朝食やディナーを楽しんでいたのです。陶磁器や茶は、同じく地場産業として産地を形成して発展してきた産業ですが、西欧の技術や製品を模倣・改良し、低価格の製品を大量生産することができた分野が輸出の拡大に成功したといえるでしょう。しかし今日、アジア諸国との競争が激化するなど、世

界的な競争・市場環境が変化する中で、従来のやり方が通用しなくなったのは周知のことです。むしろ、地場産業の分野で求められているのは、地域固有の資源や文化を体現し、その魅力、独自性、価値などを世界に向けて発信する力なのではないでしょうか。

その場合、いささか手前味噌になるかもしれませんが、地場産業のある地域に立地する大学の役割が注目されます。大学には、地域で活躍する人材を育成し、地域の行政や産業を支える基盤を提供することに加えて、地域の有する資源の価値を再発見し、企業や自治体と協力しながら、そこに何らかの付加価値をつける役割を果たす可能性があるように思われます。すでに駿河台大学は、地域への人材供給の役割を果たすことを念頭に、地域の自治体や企業のお借りする授業を数多く用意してきました。とりわけ、飯能信用金庫とは、2007 年に締結された連携協定に基づき、地域インターンシップ、寄附講座「金融 Today」の実施、地域活性化プランニングコンテストの開催などを通じて、大きな教育的成果をあげてきました。今後、駿河台大学は飯能市とその周辺に、林業（西川材）をはじめとするいくつかの地場産業が存在すること、また現在、この地域の豊かな自然資源を活かした観光分野への投資が進んでいることなどに注目しつつ、積極的に地域研究に取り組んでいくつもりです。そしてその成果を地域の皆様と共有をする過程などを通じて、地域の研究、文化の拠点としての役割をいくらかでも果たしたいと考えているところです。

